



天竺行路次所見

北畠道龍師著述

二

ル 2
 2019
 2



冊 2
2019
2



北畠道龍師

天竺行路次所見卷之二

北畠道龍師口述

門人

西河偏稱
長岡洗心

筆受

英國の事狀既上と終て更に阿蘭陀及び佛蘭西を
經て再び奧國に入てプロフエシヨル、スタイン氏の
約を踵んとするあり然るに一昨年來經查する所の
噶國瑞典阿蘭陀、ホーランド、エルザツツ、バイエルン
等の小國の事狀の如きは未だ記するに遑まあらざ
りしが何れも其の國の部内を見るに其の百政の如
き渾べて各大國の政體に摸倣して立つ所のもの多

きあり即ち周末戰國の時天下既な六た大く國こく漢魏燕趙
齊楚せいそ及び十餘の小國せうろ宋魯鄒滕薛鄭等そうろそうとうせうけいしやうと分れて其の
大國たいこくの如きハ帶甲百萬互たいていこう驕大王きやうたいわう立たて其の傍たもとら
殆たいていと其の國こく无なが如く天下の大勢たいせい専せんら六た大く國こくの手中
ニ飯いして其の小國せうこくの如きハ唯其の鼻氣びきを窺うかがふて僅
ニ立たつ立たつする者の如きあり是を以て其の大國たいこくの如き
ハ聳然しやうぜんとして頗すこる見る見るみるみる足たる所ところのもの多おほくと雖なへ
ども其の小國せうこくの如きハ靡然びぜんとして殆たいていと見る可たら
ざる者の如きあり故ゆに其の大國たいこくの大體たいたいを見れば小
國せうこくの小體せうたいハ見るみる足たらざるあり今現いまニ歐洲やうろつての實況じつきやう

を見るみる亦またと洵まことニ昔時支那戰國しなせんこくの形かたちちも似にて其の
國こくの大數たいすうを云いへば一朝いつしやうニ數かずえ難たがいと雖なへども其の
威大いだいを云いへば獨逸どいつ奧おく太利たいり露斯ろす亞佛蘭西あふらんせい英いん利り斯す及び
伊太利いとうりの六む大たい國こくの如きハ其の威い凌りやうのた高たか大たいある宛あやうも
六む大たい山さんの群ぐん小せう卓たつ越やくするが如く其の陸海二軍りくかいにぐんの具ぐ
全ぜんと及び其の文明政治ぶんめいせいじの修正しゆせいするも於おけるや昔時むかし
支那六しなむ大たい國こくの詐そ妄わう百出ひやくしゅつ不政ふせい不文ふぶんあるの比たひニ非あらざ
る也是を以て歐洲の大勢たいせい殆たいていんど是の六む大たい國こくの下風げふう
ニ飯いして其の餘の小國せうこくの如きハ實じつニ衆星しゆせいの大月たいげつニ
對たいするが如き者あり然りと云へども其の小國せうこくの尚

未だその己を失はざる者ハ蓋し一般文明の權衡を得るを以てあり是を以て其の大國の大體を見れば小國の小體の如きハ別ニ論ずる及ばざれば今特ニ其の記載を要せざるあり然るニ小國と云へども其の一二の見る可き有る者ハ亦ニ記載することも有る可きあり

然るニ一昨年六月の夏休みに際して避暑傍ニ瑞典國ニ行んと欲して即ち旅具も装ひ一のバ一朝獨逸國柏林府を發して「ハンブルヒ」府ニ至り同所より又ニ艤車ニ乗り「コルセ」と云ふ所ニ至り爰より又ニ乘

船して「唵國國」の「コツペンハーゲン」と云ふ所ニ至り又た同所を午前第十一時ニ發航して翌日午後第二時瑞典の「マルモ」港ニ至り遂ニ其の都府「ストックホルム」ニ到着して即ち有名なる「グラントホテル」と云ふ宏大なる宿ニ投宿したり

此の瑞典國ハ殆んど北緯六十度の位ニ在て歐洲でハ最も北邊ニ立つ所の邦にして此の節(七月二日)にてハ午後第十一時頃ニ至きバ漸く夜ニ入り午前第一時三十分頃ニハ東天忽ち紅色を浮べて曉とあるあり然して其の夜と云ふも其の名ハ夜なれども他

邦の夜とハ違ふて其の夜の實況ハ甚だ薄暗^{うすくら}にして宛も日本の秋の夕暮^{ゆふぐれ}の第五時頃の實況^{けいさま}も同^{おな}じきあり此の時^{とき}は當つて窓下^{まどした}は「チャイトング」新聞^{しんぶん}を展^{ひら}て之れを見るは文字判然^{ぶんじはんぜん}として少^{すく}しも讀み難^{やま}きこと無^なきあり是れは依^よて之^{これ}を云へば此の邦^{くに}は於^おてハ全^{ぜん}く晝計^{ひるかき}りよして夜^よハ无^なしと云ふても可^べかり此の實況^{じつじやう}を見るは就^すても我^{われ}が身^みこそ遠^{とほ}く日本の地^ちを離^{はな}れて妙^{たふ}ふ邦^{くに}は来^きりしもの哉^やとつくく思^{おも}ふ計^かりあり然^{しか}るは土人^{どじん}云^いく此のストツクホルム府^ほより尚^{なほ}五^ご十里許^{じゆりご}りも北^{きた}の涯^{ぎは}は行^いくと即^{すなは}ち今^{いま}もても三^{さん}日位^{にちぐらひ}は

日輪^{ひるぎ}を見通^{みとお}しよして全^{ぜん}く夜^よと云^いふ名^なも无^なき也^{なり}と其の上^{うへ}へ有名^{ゆうめい}ある「ゲオグラフイプロヘツシヨル」地理^{ちり}學^{がく}の博士^{はくし}「ハルデンシキユール」氏^し同^{おな}氏^しハ世界^{せかい}の極^{ごく}輪^{りん}を八^{はち}度^ど回^{くわい}經^{けい}されし人^{ひと}よして北^{きた}畠^{はら}親^{おん}密^{みつ}の友^{とも}ありの云^いあるはハ此^{こゝ}の瑞^{すい}典^{てん}國^{こく}より北^{きた}航^{かう}する^{こと}九^く晝^{じゆ}夜^やよして「アイスランド」氷^{こおり}の國^{くに}と云^いふ氷^{こおり}の邦^{くに}ありて此^{こゝ}の邦^{くに}の如^{ごと}きハ一^{いつ}年^{ねん}三^{さん}百^{ひゃく}六^{じゆ}十^{じゆ}日^{にち}全^{ぜん}國^{こく}年^{ねん}中^{ちゆう}氷^{こおり}は閉^とぢ込^こめられて氷^{こおり}の底^{そこ}は穴^{あな}を鑿^うつて住^{すま}居^ゐを造^{つく}り窓^{まど}も戸^とも皆^{みな}あ氷^{こおり}の戸^とを以^{もつ}て之^{これ}を塞^ふさぎ人^{ひと}ハ椰^{やし}子^この葉^はや海^{かい}馬^ばの皮^{かわ}を身^みに纏^{まと}ふて衣^いとす其^{その}の食^{しょく}物^{ぶつ}ハ夏^{なつ}はあると海^{かい}上^{じやう}

の氷り少く薄くある時分は當つて海馬が氷の上
 は遊び出るを取りて年中の食物は充ると云ふ然
 て全國中いつも氷の世界あるが故は草木とてハ一
 本も生ずること无きバ又は火を焼くことも火を見
 ることもあらぬあり其故は鉄を冶して庖丁及び小
 刀の類を作ること知らず唯氷を以て庖丁を作り
 海馬を割宰すと云ふ適他邦人の來つて鉄の庖丁を
 惠む者ある時ハ大に喜んで一挺の贈物は報ゆるは
 海馬の皮十二枚を以てすると云ふ也此の邦杯八年
 中冬計りよして其の春夏秋ハ无くと云ふても可也

り然して此の邦ハ即ち噠國の領分なきども恒に
 本國の介養を受けて聊かも本國の為めよあらぬ邦
 ありと云ふ此の如く世界の北の涯に至ると晝計り
 よて夜ハ无く又は冬計りよて夏春等の无き邦あり
 是を即ち親く我が見聞する所あり
 又之れを下方に轉じて考ふれば先達て歐洲を參り
 掛けのことありしが即ち歐洲の東南に當れる邦は
 してアラビヤ及びアデン海等を八日も十日も航行
 せしが此の邦杯ハエクアートル(赤道)の下たに當つ
 て彼の瑞典、噠國とハ大に反對よして其の暑氣の

太ど甚だ蒸熱ある中う我が日本の大暑の類ひよ
ハ非ざるあり然して此の邦等ハ夏計りよして冬春
等ハ元一と云ふも可あり此の如く世界の北の涯よ
至れば冬計りよして夏秋等が無つくり晝計りよし
て夜が無つくり又赤道直下の邦よ至れば夏計り
よして冬秋等ハ元つたり此の如く地球上を經回
して見ると邦と邦との實際よ於てハ四季の長短晝
夜の有無の同ドらざる有る而已ならず又其の
人情世態政治宗教の形狀よ於ても亦太た一定せ
ざる者あるあり嗚呼世界と云ふ者ハ能くも世界を

成りたる者よして釋尊の所謂唯識縁起の工妙實よ
其の功曠大あるもの哉此の唯識縁起と云ふこと
歐洲の「ヒロソフイ」家の「アブソル」ト「世界の大原」
と云ふこと、其の義相區別よ付てハ余在歐中深く
論查する所よして即ち印度「ヒロソフイ」と歐洲「ヒ
ロソフイ」との最も別せざる可らざる所なれど
も今爰よ一朝よ盡し難ければ他日便宜を俟て述ん
とする也是れよ就ても我が日本人民の如きハ以前
舊幕の鎖港の世の中で有つた時ハ唯ど支那と阿蘭
陀とのこよ交通して其の他の邦々とハ更よ相交る

こと无りり故に廣く世界の實況を知ること无
く唯日本より好善ある強國ハ他は決して有ること
无く又日本の刀や日本の米程ハ切き又善き食物ハ
无きありと何は付け歟は付け日本の物程善き物ハ
无りと唯内ちの事計り考へて内程善き國ハ無きな
りと思ひ澄して居たを「コンクレート」爰計りを考へ
て居ると云ふこと(の考へと云ふあり此の如き考へ
ハ闇昧野蠻國の人民の持ち物よりてかやうな考へ
で數百年來徒ら暮せ我が邦で有り故に廣き
世界の實況ハ少しも知らず居たことハ思へば々

々々愧ぢ入りたることよて有りぞのし
然るに明治維新の始めより天子自ら政權を采り内
ち從來の百政を革め外に萬國と交接を開らき何事
も世界の眞理を基ひて公然たる文明の治功を擧ん
とする今日なきハ人民我々も亦は是れ迄での小さ
き考へ(コンクレート)を投捨て「アブストラクシオン」
廣く世界を考へ且す事の大いなる考へを以て成る
丈け廣く世界の實況を知り詳し其の權衡を了して
運動せねばならぬ秋が來いふれば人々邦の爲め深
く注意あらんことを希望するあり

瑞典國の銀婚

然る所六月六日瑞典の王宮に於て「ジルベルウエー
ジング」(銀婚式)の大祝宴(即ち木王夫婦の銀婚式あり)
を開かれり。付きユリスツージウム、プロフエツシ
ヨル(法律博士)オリブクロナ氏等の奏聞に因て余を
朝廷に招ぜらきて即ち天皇陛下に謁見せ令め合せ
て此の太式に與あることを得せ令めあり。此の時朝
廷に於て對遇の都合を以て余が日本に於て如何あ
る位地を持するやを訊問し及ばれり。付き余答て
云く日本に於て僧徒凡そ十七万餘も有る可し。余ハ

其の第一末班に列する者あまは其の所を以て對せ
られんことを希ふと云ひ多れば掛りの人々大笑し
て何より申し合せて然る可く扱はれりと聞く。扱て
此の銀婚式と云ふことハ「ゴルデンウエージング」(金
婚式)に對して立る所の名にして都て歐洲に於てハ
凡そ人始めて結婚してより爾來夫婦相ひ共ニ聯存
して廿五箇年に至れば之れが為め大祝宴を開ひ
て之れを賀す之れを銀婚式と云ふあり。又其の上へ
其の聯存すること五十年及べば之れが為め更ニ
大祝宴を開く之を金婚式と云ふあり。是れ此の二

礼ある者ハ歐洲古代よりの式礼^{しきらい}よりて今尚ホこの儀を存して夫婦聯存の賀儀^{がぎ}を祝^{いわ}することハ都て人情^{にんじやう}に於ていと悦ぶ可きの賀宴^{がえん}よりて所謂^{しよわい}ミトロギ、ウイツセンシヤフトの遺^{のこ}り物あり歐洲に於てハミトロギー、ウイツセンシヤフト^{ミトロギ}〔古代の事物を保存する學文〕と云ふ一部^{いちぶ}の學文あつて成る丈^{ただ}け古代の事物^{じぶつ}を存養^{ぞんやう}することを勤^{つと}むることあり是れ亦と人世^{よせ}を輕蔑^{けいべつ}せざら^ら一種^{しゆ}の好意^{こうい}と云ふ可き也又と毎歲十二月廿四日のロイハナフテン^{ロイハナフテン}〔年越^{としこ}しの祝祭日〕の祭日^{まつひ}ハ歐洲一般^{しやうぱん}何れの邦^{くに}に於ても一家々々の路^ぢ

寢^ねの内ちよ青松^{あへんすう}を立て、夜^よハ之れ^{これ}に燭^{しやく}を點^{てん}して之れを祝^{いわ}すること宛^{あつ}も我が日本の門松^{かどまつ}を立て、新年^{しんねん}を祝^{いわ}すると少^{すこ}しも異^{こと}とあらざる也是れ皆^{みな}あ^らミトロギー^{ミトロギ}學の遺^い賜^{たまひ}と云ふ可き也嗚呼^{ああ}我が日本^{にっぽん}に於ても此^{こゝ}のミトロギー^{ミトロギ}學^{がく}が開^{ひら}けたあらハ古今^{ここん}の事物^{じぶつ}に就^つて餘程^{よちやう}その趣^{おもむ}きを愛^{あい}存^{ぞん}することも有^ある可^べきあり爾^{しか}後^{のち}ハ深く注意^{ちやうい}すべき所^{ところ}と存^{ぞん}するあり日本人^{にっぽんじん}ハ速^{すみ}く年^{とし}が寄^よると云ふ話^わ六月二十四日午前第九時^{りくごにじゅうよっぴつぜんごにじゅうくにち}ゲオグラフィー、ウイツセンシヤフト、フロフェツシヨル^{フロフェツシヨル}〔地理學大博士〕^{（地理學大博士）}ハルテ

ンシキユール氏と相ひ伴ひ「ストックホルム」府を發
一三時間の艤車^{トロッコ}に乘じ「ニッチヨビン」州の國境に至
り一休して其れより「ドロシケ」(鉄道馬車)に乗り午後
第五時三十分頃「ネベツクナール」村の「セーデル、ホ
ルム」氏(この「セーデル、ホルム」氏ハ瑞典國の大豪農に
して獨逸里數の十五里四方の山林田畑を所持して
居られる即ち「アルデンシキユール」氏の妻の姉婚あ
りの家)に着し今夜ハ同家ニ泊り翌二十五日ハ當村
の祭日にして村民一同百事休業にして其の悦樂す
る實況ハ全く日本の民情と少くも變ること有るこ

と无きあり此の日「セーデル」氏の家ニ州の知事公を
始の貴顯の男女三十餘名を招集して「アーベント、エ
ツセン」(晩食)の筵を設けられし所余も亦たその坐末
ニ相ひ列らありし宴半に至て「アルデンシキユール」
氏余ニ向ふて北畠君ハ壯年なれば今一杯の「ライ
ン、ワイン」(葡萄酒)を飲まよと云われしを傍らある
日本人某れ云く「否北畠氏ハ年既ニ六十歳にして壯
年ニハ非らざる也」と「アルデンシキユール」氏適尔と
して笑ふて云く君の六十歳あることハ我れ既ニ之
れを知る故ニ壯年ありと云ふあり抑も人生れて七

歳始めて「キンド、シユール」(小學校)に入り其れより二
十四五歳より中學大學を卒業して人の知る可き
ことを粗ぼ槩知し是を以て學文は有れ商法は有れ
以後五十年六十年間是れを實際は試み悉く事の難
易世の嶮安は徴して始めて其の見る所を得て安心
了解して以て邦の治安を公議一人の年若を育引し
て敢て愧る所なきの壮り之を六十歳と云ふあり
故に人亦た其の徳を稱して之を邦の元老と云ふ
也今北畠君年一既は六十歳より其の學已は熟し
て尚之れを世界の實際は徴さんる為めは萬國を

歴經す豈は壯ありと云はざるを得んや故は我も今
ま稱して壯年ありと云ふ也歐洲の人種都べてこの
氣風を尊び人六十歳ある之れを稱して壯年ありと
云ふ也是れは就いて一概あり我も曾て千八百七十
五年は全世界中を經回せしとき日本は至り其の邦
の實況を見るは萬國史は所謂「ケリীগス、イヤツパ
ンニス」(戦さ好きの日本人と云ふこと)として其の人
民の氣風ハ餘程と勇敢あるは惜ひ哉其の邦の敢て
振ふこと能わざる一つの原因を見出したる如何ん
とふれば此の邦の習として人苟も五十歳とあると

自亡自棄の甚しき我れハ即ち年寄ありと占めて或
ハ山林水村の間ニ別業を營いて生活せいの全權ぜんハ舉あて
悉く其の子ニ賦與ふし其の身ハ其の別業べつニ住すて生
涯無益がいの无為むいを樂たのしむ是を隱居いん様さまと稱よするあり
嗚呼日本全國の老人舉ある隱居様いんニ少すくしも元老げん
壯年さうの氣風きふうを養やふこと无なれバ邦の治安ちあんを公議こうぎし年
若わかを育い引ひする者ハ果たまして之れを誰たれとうする乎此
の如ごときの實況じつきやうニてハ假令たとひ其の邦の政治せいを改あらめ其
の文明ぶんめいを進すすめんとするも恐おそくハ大いなる好結果こうけつを
得えて他の強國きやうこくと並立へいりつすることハ遂ついニ難がたうる可べしと

慨然がいぜんせしこと有り然るも今日北畠きたはた氏の六十歳ろくじゅうさいを稱よ
して壯年さうねんと云ふものハ即ち歐洲人民しやうしやうじんの占稱せんしやうをる所
よして庶幾しよきくハ日本全國の人々も深く此の意いを體たい
認とんしてこの元老壯年げんらうさうねんの氣風きふうを培養たいうやうされとあらバ大
いニ其の國力を輓回せんくわいし必ず其の裨益ひえきするところ有
るをば北畠君きたはたきみよ君も元老げんらうの一人ひとりなれば他日
本ほん為歸朝きしやうの上うへハ先づ第一だいいちニ此の事を説明せつめい訓督くんこくし
て日本全國の舊弊きうへいを一洗いちせん致いたさされよりと刺々しし痛いた
切せつニ忠告ちゆうこあし呉くまければ余即ち立たて謝あやして云いく此
の言實ごんじつニ我われが邦の金科玉條きんこぎよくじょうなまバ必ず慈教じきやうの通り

相ひ奉ず可一と肯諾致せ一ことあれば今日無事飯
朝せ一上へハ又と此の事を懇々陳說せざるを得ざ
るあり嗟呼日本人民諸君よ何卒ぞ邦の為めは是を
迄の隠居様風ハさへ一なり之を放却致一度きもの
ぞり一之れを放却するに付てハ單の徒手でハ出来
ませぬ其のことハ他日便を得て説明す可けきとも
諸君も少一ハ考ゑて見らばよ

瑞典國の憲法政治

法律博士オリフクロナ氏云く我が瑞典國の如きハ
千六百六年より同く六十六年以前は在つて其甚だ

古風は依て未だ真に其の政理を得ざる者は非らざ
り一故に貴顯家と僧家と市民と農民との四部の人
民總代と云ふことを以て議員を定めて其の百政を
議事せ令めたり然るは千六百六十六年の時に至り
我が邦の文明漸く進み人亦と其の政理の在る所を
知て即ち上下の兩院を公開し全國一般人民を總代
と云ふことを以て議員を立て、百政悉皆之を其
の公議に決することありし故に我が邦の政體全
く大革して始めてヘルフワツスングモナルヒ憲法
政治の公然たる政道の真理は立つことを得て全國

人民の天幸之きを昔日は比すまば豈は宵壤と云ふ而已あらんや然くは爰は達する迄の千思萬慮實は一朝一夕のことと非らざりしあり然るは貴國日本の政體たる明治二十三年に至まば愈は是迄の舊政を改めて全く憲法政治を立ると聞くあり實は治國の完計是れより好ましく死す也故は何卒其の平穩は立政有らんことを希望する也と懇々相ひ話さるしこと有りしあり是を依て之れを考ふるは今我が明治二十三年を以て彼れの千六百六十六年と對すまば殆んど二百二十餘年の日子を經過せり嗚呼

文明進歩の遲速其の差ひ死すことを得ずと云へども我れの彼まは晚歩すること宛も二百二十餘年の後是在りと餘りの差ひあらば我が建國の大典は於ても亦は我ま人の知識上は取りても相ひ愧ぢざる可うらざる所あらども然し其まは既往は屬したる者あらば致し方の死すこととして措き即ちオリフクロナ氏の懇話の如く二十三年に至つとあらば何卒憲法政治の無事平穩は公議正定あらんことを希望するあり夫まは就きても獨り天子の恩眷を勞する而已は非ずして我々人民も亦は智料を濯摩して

成る丈けこの美舉を推軛一奉らんことを思わほ
くも有る哉余曩も填獨の間も留筈せしとき兩國の
憲法立制の傳話を聞くこと有りて甚と思ふ所あり
今爰も盡し難けま他日亦と便を俟て述る所あら
んとする也

瑞典國プロテスタント宗の改正

千八百八十一年七月三日瑞典國のストツクホルム
府に在てエルツ、ビシヨツフ(大教正)キツチエ、ン師
面たり此の師ハ原と獨逸人よりて瑞典國も來り
住す即ち當國第一の大教正よりて人皆云ふ師の

學徳の峻高ある即今歐洲全國すべて其の比匹と云
々成程余ハ各國を歴回して其の邦に入るときハ必ず先
づ其の邦の第一識者と及び其の第一高僧ハ必ず面話
咨問せざるハ无きあり今其の曾遇する所を以て之を
見ると今師の人とありや氣宇宏恢よりて其の談論する
所の辭氣甚だ人情と切近して彼の曾遇者の談の少
く人情と遐りまろの類も非ざるを見るあり余甚だ之
を異として深く交りを結び殆ど其の淺あらざるも
達せり一日師余も言て云く其も宗教と云ふ者ハ時と
共も相ひ適當して立つ可き者よりて宛もブリツレ(眼

鏡)の其の人_ニ於るが如し即ち「ブリッレ」_レニ_二つの種類
あつて一つハ「コンユアー」(中低眼鏡)ニ_二つハ「コンウエキス」
(中高眼鏡)あり其の中低とハ「_レ」の如き形_ニて是れ
ハ壯年の人の眼鏡_ニて壯年の眼中_ニハ液類の充_レた
するが故_ニ其の形_ニち中低_ニ造りて之_ニは應_ズ又_レ老
年の眼中_ニハ液類次第_ニ枯渴するが故_ニ其の形_ニち
も亦_ニ隨ふて「_〇」の如く中高_ニ造りて以て之_ニは應_ズ
ず可_キあり是を以て其の應_ズ形_ニ少_ニもても其の度_ニを
失ふ時其の眼鏡_ニも亦_ニ全_ク其の用_ニを為さ_ズるが
如く宗教の世と共_ニ推_レ移_レ人と共_ニ改_レ進_スべきハ

即ち是_レき宗教の世_ニ處する所以_ニて實_ニ眼鏡の
凹_レ凸_レ人の老壯_ニ相_ニ應_ズて少_ニも其の度_ニを誤_マる
可_キらざ_ルる_ニ如_キ者あり凡_ソ宗教者_ニももの歐_ニと
あ_ク亞_ニとあ_ク深_ク注意_ス可_キ所あり然_ルる_ニ中古_以
來我_レが歐洲の如_キハ宗教の政治_ニ於ける最_ニ能_ク
其の權_ニ衡_ニを治_メて其の文明の開_レ進_スる宗教大_ニい_ニ
之_ニま_ニ其の率_ニ先_ニを為_ス所_ニ有_リあり然_ルる_ニ物_ニ換_レり
星_ニ移_レりて近_レ來の世_ニ形_ニを見る_ニは世_中の識_見日_々
銳_ニ進_スて宗_ニ徒の實_ニ力_ニ少_ニく陵_レ夷_ト殆_ト文明の權_ニ衡_ニ
を失_レ却_レせんとする_ニ似_レたり此の形_ニ勢_ニは遂_ニ文

明の率先あきらむること能あたわざる而已のみは非あららず又または以もつて己おのが一家いっかを保持かぎすることも能あたわざる可たきあり是こゝに於おて余あ慨然がいぜんの餘あまり千八百七十八年の始はじめより同おなく八十一年はちじゅういちねんに至いたるまで三ヶ年の間まが大きい我われが全國ぜんこくの宗旨しゅうし(プロテスタント)を改良かうりやうし悉ことごとく其そのの習弊しゅうへいを一ひと洗あらして再び其そのの權衡けんかうを改鮮かいせんすることを得えたりと云い々わせり是こゝに即すなはち即今いま歐洲おほやに於おて宗教改正しゆじやうかいせいの第一だいいち率りつ先まあるものよして「キツチエン」師しの卓見たつけん世よに尊稱そんけいさる、所以ゆゑの者夫そのも爰こゝに在あるあり嗚呼ああさすがは文明ぶんめいの邦くにさけあつて頃日ころひ獨逸國どいつこくに於おても亦または「コンチー

ル（僧徒の大會）を建て、大いおほに其そのの改めんとする所ところある由よし、其他その亦または各國おほの近況ちんきやうを見聞けんもんするは何なにも宗旨しゅうし改良かうりやうの梅蕃ばいばんを開發かいはつせんとするの意いあり是こゝれ亦または歐國おほの文明ぶんめい世よに稱譽せうよさる、所以ゆゑのもの其そのも爰こゝに在ある歟や然しかるは我われが日本にっぽんの八宗はっしゆを見るは舊株きうしゆ依然いぜん果はして其そのの為ためす所ところありらんとするが如ごとし庶幾しよげくは我われが全國ぜんこくの人民じんみんたる者深ふかく注意ちゆいせざる可たりらざる所ところあり扱あて瑞典國すいでんこくハ歐洲おほ第一だいいちの「アイゼン」（鉄）を生なし又またはチントホルツ（木燧）を出だすことも亦または第一だいいちと稱なするあり然しかるは此こゝの邦くにの鉄てつたるや實じつは其そのの性せいの堅良けんりやう

ふる上る其の煨職の者も亦た頗る其の工妙を究む
るが故は一切刀劍の類は於てハ其の全良あること
此の邦を以て歐洲第一と稱するあり小さく之れを
比例すれば我が日本はてハ泉州堺の刀類を以て日
本第一と云ふが如きあり而して彼れハ世界第一あ
れハ日本第一の分ある而已又と其の木燧を輸出す
ることの最も多數あるハ是れ亦た歐洲第一と稱す
るあり以上瑞典國ハ其の邦小ありと雖も其の見
所の多きを以て其の一二を乗記すること此の如き
也其の餘小國の如きは左の之見る所の无きを以て

皆亦之れを畧省するあり因て以下ハ再び墺國ハ入
るの事實を陳す可きあり
英國を發して再び墺國ハ入る
同年七月二十八日午後第八時「アツパベトホルト、ブレ
ース」の二十八番地を發して同國「クインズホルク」と
云ふ港に着し第九時同港を發し海上十時間を経て
翌二十九日午前第七時頃阿蘭陀國の「フリーシンゲ
ン」と云ふ港に着し此の度ハ阿蘭陀國（阿蘭陀國ハ過
日既ハ経回せし故）ハ直通りよりして其れより「フロ
シヤ」「バーデン」「ビヨッテンベルヒ」「バワリヤ」等の邦々

を歴て遂に奥國の「マインツ」に至りあり此の間の
艦車まきしやは扱てく惘り入りまゝた如何とあれバ此の
間の鉄道ハ素とより小徑鉄道と稱して艦車も甚ど
小あること宛も日本の新橋發の艦車位ひの者より
て其の行くことも亦と甚ど遅漫ある而已に非らず
此の間は於て十一回其の車を乗り替へり土人で
さへも事は因てハ十方も元き所を持て行ける程
の事なれば他邦人ハあを更ら注意せずバつまらぬ
所を所持けられて仕方の無い事が屢バありと聞
く實に困難ある道中と云ふ可きあり是より再び

奥國「ウインナ」府に至り兼て親之のある「ウナガリヤ」
ホテル「旅宿」に投じ種々慰勞さきて始めて長路の疲
勞を休めたり
夫より先づ日本の公使館を相ひ尋ね踵でプロフ
エツシヨルスタイン氏の家を尋ねし所同氏ハ既に
避暑の爲め「ワイトリンガ」村の別業に至られし
と聞く故に翌二日午前第八時の艦車に乗じスタ
イン氏の別業を叩き即ち氏に面し互に暫くの別を話
し相ひ喜ぶこと涯あり「スタイン」氏云く北島君よ君
八年既に六十歳然るに彼の有名なる「アタランチ」

クの大洋を來往して亞米利加に至り又々再び歐洲
 へ立ち販り更へ我が墺國を來りたまふこと宛も此
 の世界を小手毬の如く思ひたまふや何ぞ豪氣の壯
 大なる其の上る身體の少しも恙がなきハ實に賀す
 可きの至りあり今夕ハ久方振りよて晩食を呈す可
 し緩々話して長き旅の勞を慰へ玉へとて懇篤な
 る佳饗を圖らす時を移せしあり
 「スタイン氏と結約する事
 翌朝又「スタイン」博士を叩き余博士は請ふて云く
 我は先年來獨逸國に於て取調べらるる所の條件之

れを悉く其の各國の實際に徴して今其の槩數を知
 ることを得たり然して今再び爰に來る所以のもの
 ハ庶幾くハ博士我が曾調する所のものを更へ再論
 裁決して我れをして飯朝の後ち苟も事を採るの日
 少しの差謬无ららめんことをと云ひけきハ博士
 欣然として膝を打て云く諾我れ將さ日本を為め
 如何にも其の事を師と熟議せんとするあり然る
 へ我はこゝ一つの願ひあり我を曾てより亞細亞の事
 (佛儒二教のこと)を聞くと欲して亟む之れを其の
 人(日本人)を求むまじと甚と太を粗對して未だ其

の要領を得ず然るに師幸ふ爰ふ來る實に我が素志
を果す可きの秋至まるあり我が悦び亦と云ふ可う
らざる也因て晝ハ我れ師の爲め話すべし夜ハ師
我が爲め話せらまよと云わまし故に余も亦と其
の意の懇到あるに感して遂に其の事を然諾したり
然るに以下「スタイン」氏の説ハ間く之を乗記する
こと有り云へども余が話の如きは敢て之を畧
除するあり

「スタイン」博士云く今日歐洲の強大にして亞細亞の
微弱あるハ畢竟トて文明の開否は是を因る所は

て其の文明の開否ハ全く是を政體の如何に因るも
のあり然して文明ハ即ち是を其の政治の治徴より
て希臘よてハ之を「コルトア」と云ひ獨逸よてハ之
を「ビルドンク」と云ふあり然るに近古以前は於て
歐と無く亞と無く其の政體とる悉皆「ウンエントリ
ヒ、ゲワルト、モナルヒ」無限の威勢政治と云ふ政治よ
て有り一所我が歐洲の如きは政理益々進んで其の
舊政の如きは悉く之を廢棄して即ち「ヘルフワツ
キング、モナルヒ」と云ふ新鮮活潑なる憲法政治に改
まりて歐洲一般の文明皆は是を此の政治より顯發

する所のものとするあり即今歐洲の強大なる所以
のも此唯是き此の一舉は在るあり然るは亞細亞地
方の如きは今以て其の舊政を堅守して敢て其の改
むる所を知らざる者の如し又と甚だ如何がある申
一方あきども其の地方の人の如きは文明と云ふ名
さるも未だ之きを聞らざれば其の真利を知ること
ハ尚わ且つ遠く遼うあり是き即ち亞細亞全部の遂
は微弱ある所以のもの全く此の一事は因るあり然
るは聞く所は因きば日本獨り振然として其の舊政
を排斥し新とは憲法政治を建て、大い其の文明

を興起せんとする由一謂つ可し亞細亞洲中文明の
第一率先ありと嗚呼日本人民の天幸實は賀す可き
の至りあり其まは就て日本の政治家の如きは素よ
り論を瑛たず又其の僧家と云へども余程其の改む
る所有らざるまは其教法を將來に維持することの難
き而已ならず亦た邦の爲めも其の裨益する所あ
る可あらざる也故に北畠君は庶幾くハ邦の爲め
深く注意あらんことをと全地球上に就て先づ西歐
東亞の闇明隆衰する所以の原旨を懇々告示せらる
たり余以為く此の話ハ甚だ平易に似たりと雖も凡

そ此の世界を治めんと欲するものハ桑門と云へども亦た深く意を用ゆべきの大本あり
是より約の如く畫ハ余百事は附て博士の裁判話を聞き夜ハ余博士は對して印度とロソフイの原意及び漢學の大意を述べて互ひ相ひ止まざるかと宛るも一線の綫の如きあり然して博士の述ぶる所のものハ博士自ら書して以て余は與ふ即ち遂に積んで數卷の層を為す至まり實に我が宗教改良の舟楫あり
スタイン博士云く北畠君よ即今宗教の政治と人民

とよ附ての關係を詳らよせんと欲せば宜しく先づ其の政治人民の何は物とることを能く詳らよして然して後ち其の關係の如何を知るべき也然るを其の政治人民の何は物たるを知らずして偏に宗教の關係を談せんと欲するハ宛も其の斗量を辨せずして其の菽麥を測らんとするが如く遂に其の功を全ふすること能わざるが如きあり故に先づ其の政治人民の何物たるを知て然して後ち始めて其の宗教關係の如何を知る可きあり
宗教政治同異の辨

一日「スタイン」博士余に問て云く北島君よ抑も政治と宗教とハ同一ニ立つ可きものとするや又た離れて立つ可きものとするや如何ん余答て云く夫を宗教政治の相ひ離す可あらざる所以のものハ宛も桴鼓の相ひ應す可き者の如きあり是を以て知る宗教政治ハ共ニ同一ニして立つ可き者とするあり又た其の政治宗教の相ひ離して立つ可あらざるハ宛も桴鼓の相ひ離る可あらざるが如きあり博士問て云く然らば其の同一ニすると云ふもの之を如何に同一ニするや詳う其の意を示さきよと余答へて

云く苟も之を同一ニすると云へば共ニ之を同一ニする而已此の上へ別ニ同一ニする仕方の有る可き筈無きあり博士云く然らば北島君よ今君の言の如くあらむ甚ど我が問意を解せざるに似たり因て我も今君の爲めニ政教同意の大數を述べんとすらあり凡そ古より以來の政體を見るに大いに分きて二つとあるなり其の第一説ハ政教ハ同一たりべしと云ふこと又た第二説ハ政教ハ相ひ離して立つ可しと云ふこと其の初めハ同一と云ふに付て亦と分きて二つとあり其の一ハ宗旨を基として

政治を其まよ同一ふして政治を立つる之きを「テオ
クラチー」(希臘の言也)の政治と云ふあり又その一
ハ政治を基として宗旨を其まよ同一ふして政治を立
つる之きを「チエーザルパピイスモス」(希臘の言也)の
政治と云ふあり此の中あり「テオクラチー」の政治ハ古
代亞細亞地方の邦々多多く行われし所の政治より
て歐洲に於ても古代往々此の政治が行われし其
れ等の舊政ハ漸くは廢棄して即今もてハ歐洲一般
「チエーザルパピイスモス」の政治を相ひ用ゆるこ
とよあり然るに今より二十年以前迄ハ羅馬法皇

の伊太利國を領せし時ハ尚此の「テオクラ
チー」の政治を用ひられしが其の邦を伊太利帝は奪
られてよりハ法皇ハ唯一大本山の法皇と云ふに止
まることあり然る所歐洲に於てハ即今土耳其
國の「コンスタンチノーブル」府の「マホメツト」宗の法
皇のみ獨り尚此の政治を用ゆるあり以上こ
の「テオクラチー」と「チエーザルパピイスモス」の
區別ハ畢竟して宗教政治を互ひし後と先きとする
の違ひより建つ所の名よりて政教同一の義ハ素よ
り同一ありと知る可きあり次は其の第二説の政治

宗教ハ相ひ離して建つ可しと云ふハ是れを果して
政治の眞理ニ非らざる一種の學者の僻見ニして此の
説の如きハ古來より文明の邦ニハ實際ニ行はる可
き筈ハ无きあり然るニ歐洲と云へども其の未だ政
理の開けざら以前ハ尚ホ此の政治を行ふものあり
と云へども即今よても政理ますく開進して此の如
き政治を用ゆる邦ハ一ヶ國も是れ无きあり然るニ
亞細亞地方の如きを即今尚ホこの政體（上ニ云ふウ
ンエンドリヒ、ゲワルトモナルヒ）にて政教相ひ離
まゝなる政治あり）を用ゑると聞くあり就中支那の如

きハ其の邦最も大國にして此の政體を頑守して其
の四隣の小國も亦と自ら之れニ模倣して多くハ皆
其の政體を用ゑるあり是ニ因て亞細亞地方の暗
昧爰ニますます谷まされるなり然るニ日本の如きハ明
治二十三年ニ至れば斷乎として其の模倣政治を抛
擲して始めて憲法政治を建ると聞く實ニ亞細亞第
一等の卓見と云ふ可きあり其れニ付てハ北畠君よ
此の度日本ニ於て建る所の政典ハ之れを小ニ云へ
バ日本の治本と成り之れを大ニ云へバ亞細亞全部
の規本とも成る可き實ニ大切あり一大美譽として

此の擧若一全く擧る時ハ他日必ず亞細亞全部を率
ひて彼の歐洲と對峙して敢て少一も譲らざるの位
地ニ達す可きあり豈ニ快然の至りニあらずや其れ
ニ付て此の政教同異の分ハ如何ガ建てらるゝ歟ハ
知らぬが此の建て方が實ニ本國治本の第一歩一
て一朝之れを容易看は誤まる時ハ他日必ず如何と
も回救す可らざるニ至らん嗟呼日本の人民々々
もの深く注意す可き所あり其きニ付ても北畠君よ
聞く所ニ依れば是きまで流弊せら日本の宗教なれ
バ餘程改洗せざれば又ニ致一方ハあるまいと思は

まます君ハ桑門の第一隗あまバ必ず其の為す所あ
らんことを切望するありと懇陳されり余深く感
ずる所あつて云く諾我も他日皈朝せば必ず正さ
為す所ある可一と對答し
以上擧る所の「テオクラチー」と「チエーザルハピイス
モス」と「ウンエンドリヒ、ゲワルト、モナルヒ」との三種
の政治法の原意を詳しするること、又之をを歴
史上ニ説き明らすこと、其きニ付て宗教上の心得
方の有る所等ハとても爰ニ一々述べ盡し難けきハ
我が別記ニ譲る可きあり他日見る可一

政治宗教天然の關係

「スタイン」博士云く其の宗教政治同一の義ハ上ニ之
を述ると云へども其の同一なる可き眞理を詳
しせざる可らざるあり之を就て「ピロソフイ」家
の言ハ「カオザール、ネーキステ、ツイッセン、キルヘ、ウ
ンド、スタート」と云ふことガありて其の「カオザール、
ネーキステ」とハ天然の眞理ウラ關係すると云ふ意
ハ一して是即ち宗教と政治と云ふものハ政治ウラ
も天然上ニ宗旨ニ關係を持たねをあらす又ニ宗教
ウラも天然上ニ政治ニ關係を持たねをならぬと云

ふ意味あり此の義ニ就て博士の詳細あり 説述こそ
ありと云へども今爰ニ之を辨ずるときハ甚多
死ニ直らんことを恐るゝガ故ニ之を畧除する
り又ニ此の義ニ就て其の夜話の節余印度「ピロソフ
イ」と歐洲「ピロソフイ」との區別を述べ「所博士
始めて印度「ピロソフイ」の深遠ニて且つ詳明
ることを頻りに感悦されて互ニ夜の閑あることを
覺えず實ニ面白きことニて有りありこんなこと
も所謂内ち鼠みよて日本計りよすつこんで居りて
たとへも此の如き面白き世界の眞理を知ることハ

ならぬぞのー畢竟博士の「ヒロソフィー」を聞きとれ
むこそ我が持ち物(印度「ヒロソフィー」)の深き味ひの
有ることヶ知まこと云ふ者あり今又之を爰に
詳のふすること能まざれば他日便を埃て具陳す可
し
然るは博士云く其の宗教政治の同一は於てハ同一
ハ素より同一と云へども其の同一の建て方は就て
ハ強ち杓子定規ハ參らざるあり是を以て獨逸國
の立政の如きハ或る部分ハ之れを同一し又或る
部分ハ之を相ひ離して然して以て其の同一の主

義を全ふすることを得るあり我が壘國の如きも亦
た此の意に摸倣するの外他无きあり其の各國の如
きも亦と多少の參差之れ无きこと能まざるものハ
其の政治宗教々天下の活物に相ひ應ず可きの大活
法あればなり政治家宗教家らものハ深く此の意
を體認して宜しく其の處する所有らざるを得ざる
ありと云々嗟呼日本八宗の僧徒果して之を如何
んとう思ふや
博士云く其の苟も文明の政典を擧んとするときはハ
此の如く政治と宗教と云ふものハ決して切り離さ

して措く可きもの非ずとする以上ハ此の二つの
者の間ハ互ひ其の「エーヘンリフスト」(蘭語)一
てつりあいと云ふこと(の權衡を得て決して「アンタ
グニツセ」(蘭語)一てふつりあいと云ふこと)の不權
衡はあらぬやうに互ひ深く注意せざる可からざる
也是を以て政府ハ妄り宗旨を陵歴して獨り己
れの意を偏張す可からず宗旨者も亦妄り政治は
抗對して獨り己が意を偏張す可からざる可く互ひ
は能く從容相ひ和して其の同一の主義を全ふす可
きなり然るに今日日本の爲めは之れを考ふるに他日

若し政府が寺の爲めは左の三條(一ハ「ゲゼツツ、イ
ーベル、ユリジーション、デヤ、キル」ハ、とて寺の法律の
爲めは政府が規則を出さること二ハ「ゲゼツツ、イ
ーベル、ジール、ヘルワルトング、デヤ、キル」ハ、ヘルメーゲン、
とて寺の身代の爲めは政府が規則を出さること三ハ
「ゲゼツツ、イーベル、ジール、グラウベン」とて寺の信心
の中へ政府が規則を仕込むこと)を著けて其れ
此の如くせねばあるは是れハ此の如くせよと種々
指圖をなるときは其のとき寺ハ單に唯々として沈
黙して居ることハある也若し苟も沈黙して居た

三十一

あつても其のとき即ち宗旨と云ふ者ハ頽壞たいくわいして一も
ふ也若しや宗旨が頽壞したあつても人心じんしん忽ちたち狡悍かうはんの
意を現し人遂は暗昧あんまいの世とあらんときハ豈いかも
獨り宗旨の頽壞たいくわいのく止まらんや亦た遂は天下の
大切は波及はくきを可き也歐洲は於ても各國の政府苟も
政治の改正を言ひ出るときハ必かならず此の三條を手を
入れる也然るも日本は於ても此の度ハ歐洲風の憲
法政治を建ると聞けば必かならず又た歐洲風は宗教上も
手を入れるのも知れざれば宗旨者たるものハ豫あやめ
此の(キルヘレヒト宗旨の規則)ことハ能よく之れを詳あ

明めい子修正しゆせい一いっかかざれば豈いかも獨り宗旨の爲め而已な
らんや實は天下の大事なりと懇こんに告示こしされたり余
今いま此のこことを爰こゝに乘記りやくするものハ我が邦の如き
ハ即今いま新舊二政代交の境界きやうがいにして實は一大事の秋
あれば此のことは就つてハ政教二家の人々ひとは深く注
意あらんことを希望きぼうするなり若し苟も一朝之をを
粗鹵そくに過つて他日如何んともなること死しきの大失
墜たいを惹ひき起おこすときハ我が天下の不幸是れより大
るハ死しきなり
博士又た云く此の如きの不幸を救わんとするとき

ハ日本の宗教家たる者ハ先づ第一ニ非常の大改革
 を行ひ宗政をして時機ニ契當せ令むるニ在リ(是れ
 即ち凡僧の行ひ得る所ニ非ざ)又ニ第二ニ時世開進
 の大學校を建起して僧家の知識をして世の中の識
 者の上ニ立た令むるニ在るあり(是れ亦ニ葛僧の為
 一得る所ニ非ざる也)嗟呼日本の僧家此の二つの者
 を行ひ得ざるときハ全國の宗教ハ遂ニ腐敗ニ皈
 て然して有力ある他國の宗旨の爲めニ轢軋されて
 日本の人心ハ日々日本より放れて皆な悉く他國
 小散り行く可一其の時ハ失敬あがら日本國と云ふ

ものハ亦と遂ニ敗亡をること有らん乎北畠君よ
 實小本邦の一大事あり深く注意一玉ふ可一其れニ
 付て余日本の爲め其の方法を述ふべ一とて凡そ
 六ヶ月間ワイトリシガ村の別業ニ於て晝夜兩度
 づ、談論筆與せられたる者(スライン博士の直筆)積
 んで三卷あり是れ即ち我々宗教改良の三畧なり然
 し今爰ニ是れを述ぶるニ違ま非ざるあり然るニ今
 此の談話中ニ有力なる他國の宗旨ニ軌轢されて日
 本の人心ハ日々日本より放れて皆な他國ニ散り
 行くと云ふ一條ニ於てハ實ニ宗教上ニ就ての邦の

大事ふり余博士と種々熟議せしことあり便宜を疎て述ること有る可き也

政治宗教は就き獨英墳佛伊の小學校

博士云く抑も其の邦を治安せんと欲するときは能く政治と宗教の部分を修正するに在り其の修正するの道は最も小學校を以て其の元始とする也是れ

は就て今獨英等二三邦の小學校の校則を述べて其の義を話せんとするふり然るは彼の英國の如きは

ミナール（小學校師範學校）を建て、小學の教員を教養

すること有りと云へども其の規則は於てハ小學中

はハ宗教も僧徒も之れを入れざる也又た佛蘭西の

如きは英國の如く宗教ハ小學校ハ之れを入るざる而已ならず其の上ゼミナール（を建てると云ふこと

も無く其の小學校員（の撰び方と云ふ者ハ甚だ粗漫

として其の算術と書くこと、及び讀むことが出來

さぬされバ誰（もても教員たることを得る而已ハ非

ず又た或ハ賄力（を以て此れは入ることを得る者有

りと云ふ也是を以て其の教員ハ其の僧徒（僧徒ハ世

の中の文明のことと通じて居る故に）の輕呑陵蔑を

受けて宛（も自ら立つこと能わざる者の如し其れ

故に僧徒ハ恒ニ小學のことハ之れを左右して扱ふ
の弊習ありと云ふ也伊太利の如きハ其の小學校の
規則ハ全く佛蘭西ニ模擬して之れを建ると云ふと
も僅ニ三十年來のことなるまば其の法未だ太だ修成
せず其の教員と爲る可き者も一層卑淺より亦
甚だ僅少ありと云ふ也獨逸の如きハ今より二百八
十年前第六世「フレリツキ」の時始めて小學校の制
度を立て、人生れて苟も七歳となまば一月より必
ず小學校に入る可し若し苟も此の制度を奉ぜざる
ときハ必ず其の父兄を罰を可しとの嚴令を下され

たり是れより以來全國の人民肅然として苟も七歳
とふれば必ず小學校に入るを人の常典と心得るこ
ととなり也其の上級「セミナール」の師範學校を建
立して其の教員を育養をること亦た頗る精密に
して其の教條中ハ宗旨上の教科を甜入して其の
道德を育生をること亦と頗る精密なり然りと云
へども其の教員其の師範學校を卒業するも直ち
は其の教員たることを許さず正しく之れを用ひん
とするに當つてハ尚ほ「ゲマインデ」(人民社會)に於て
撰舉委員を立て、其の教員を票撰をること要を

るか故に其の小學の教員たる者實に識徳具全にして
甚だ人民の尊信を得る而已に非ざる又僧家と云へ
とも敢て之をを陵蔑せると云ふこと尤きなり余(博
士自ら言ふ)以為らく即今歐洲全部の小學制度なる
者獨り獨逸を以て最も能く備具を云ふ可き也我
が奥國の如きは素より小學校は宗教は既に之れ
を入ると云へとも未だ甚だ修成せざりし所今より
四十八年前都て獨逸小學の校則は模倣して其の「セ
ミナール」を設立せむることより及び宗旨を輸入せむ
こと等に至るまで一切悉く之れを獨制し倣ふて少

しも異なること有ること尤き也是に於て我が邦の
校則も亦た頗る善良に至りたりと云へども獨逸の
如きは既に二百八十年來の久しき之れを修成させ
たり我が邦の如きは僅か四十年來の追進しして進
むハ則ち進んだりと云へども我が全國中の小學校
の如きは尚ほ「コンフェツション、ウント、コンフェツ
ション、ロス」と云ふて此の中「コンフェツション」と
ハ宗旨を入れたる小學校と云ふ意又た「コンフェツ
ション、ロス」とハ宗旨を入らざる小學校と云ふこと
にして即ち宗旨を入きたり又た宗旨を入れざる小

學が有ると云ふことよして未だ獨逸の如く全國一般小學の宗旨を入まざる校の無きが如く能々密に且つ盡せるまは尚ほ及むざる所有るなり嗟呼小學の建構既此の如く差等あるを以て其の文明の度分は於ても亦と及ばざる所あるハ素より免る可あらざるの事實として今日墺國人民の振然として勉むる所以人の者ハ専ら爰に在るなり然しおがら英佛二國の制の如きハ未だ共ニ文明の如何人を談ざるは足らざるなり北畠君よ今日此の如き世界の權衡は當つて日本の如きハ奮然百政を大正して大

ひは亞細亞地方は雄飛せんとするの秋あれば別して此の小學の制度ハ最も第一は注意すべき所なり此の制度の如何は因つて遂に邦の明暗を為す可きものなまは實に憾む可きことぞかしと云々此の小學の「システムチー」組織は付てハ種々取調しこと有れとも爰でハ盡し難けきハ聞き度き御方ハ拙宅を御出なさいよ

北畠云く此の如き博士の懇陳ハ實に我れ等宗教改良の原案文明開進の金鐸と云ふ可き者也如何んとおれは其れ小學校ハ「エレメント、リユール」と云て「エ

レメントとハ原素と云ふこと「シユール」とハ學校と云ふことよりて然れば小學校ハ即ち原素學校と云ふことよりて凡そ人生れて七歳よりて小學に入り始めて人の道を學ひ是れより智識を養成する所の大原たるを以て原素學校と云ふなり此れは依つて之を云へハ人世凡百の事物この大原を修むるを以て其の元始とするなり是を以て人苟も正人端士たらんと欲するときは必ず此の校に入るを以て初歩とするあり其れ故に上り擧る所の文明正大の各邦何れも此の校を開建して以て其の民人を育引す

るの始めとす實に蘭菊其の美を争ふと云ふべき也凡そ其の邦を見んと欲するときは唯其邦を以て偏小之れを見てハ邦の可否と云ふ者の決して見得べきもの非を却て偏信其の大体を誤まること有らん歟故に苟も其の邦を見んと欲せば必ず他の邦を擧て以て其の邦を見るときは對見批判して其の可否の甚た見易きハ素より其の論を滅たざる所なり今博士の語は因て獨英等の建校の可否を比見するときは其の得失死と云ふ可らざる也此の如き文明の邦よりて尚ほ其の得失死きこと能わざれば

天竺行略記

卷之三

三七

其の他野蠻半明の邦に於ては素より其の所あり然るも我が日本の如き維新以來百政日々改り百事益々新たならざるの元と云へども其の中我が民人を育引するを以て最も其の一大至要とせざるあり如何んとなまば假令ひ百物の改まるも民智發育せざるときは果して之を運用せることを得ざればなり然るも我が政府の如き此の育引の道に於て其の心を盡さざるも非ざると云へども其の事日淺きが故に未だ其の可至達せざるを以て去年十二月更に文部を改良して大いに爲を所有らんとせらる

あり人皆云く天子大いに此の育引の道に心をを用ゆると嗚呼育引の道に人を大成せらるの次順よりて原素學校即ち小學校を以て其の元始とせれば日本若し此の學制を振張せんとせるときは宜しく上より云ふ所の各邦學制の可否を對問し其の得失を批判して其の不可ある者の斷乎として之を芟去し其の可ある者の之れを採取して以て我が建立せらる所のものを參考助發して假令ひ各邦の制度と云へども敢て一步も譲らざらむ可き也博士云く教育の道一朝之を誤るときは他日之れを如何んとも救ふ

可あらざるの大害を惹起せんと云々北畠云く嗚呼
小學の人世進歩の初歩實は慎む可きの大始ある哉
スタイン博士の雑話

博士云く上は獨英等の小學校のことを述べが我
れ六十年來歐洲にあつて其の小學は宗旨を入れた
ると又た入らざる邦の實状を熟見するふどりて
も入れざる邦(英佛)の人民の慄悍は入れたる邦(獨墮)
の人民の信實あり其の故を如何んとなれば其の宗
旨と入らざるの教への唯智は偏長なるが故に其の
人とありや自ら慄悍あり又其の宗旨を入るの

教への智徳を兼具するが故に其の人とありや自ら
信實あり是を以て苟も小學を起さんよ必ず宗旨
を入るを以て要とする也如何んとあまの人の信を
導き道德は入ることを教あるの宗旨は如くもの先
し其の上は神佛の「ベウストザイン」神佛の有ると云
ふことを感知するを云ふなりを感知するは現未二
世の心掛け厚くなるが故に政治上は於ても亦大
いある利益を生きたる也
又云く日本の政府の如き日々は文明は進むべし
然るは其の僧徒たるもの其の文明の何は物たるを

知らず徒と漠然として居るならばとも日本の宗教の保持をること難き而已ならず遂に壊敗は飯を可し實は注意をべき也又云く其の文明の何は物の處を知らんと欲せば其の智識と道德と教育との三つの性質を能く審了を可きなりとこの三つの性質のことい今爰は詳悉す可からを龍が別記は具載されバ他日便を俟て述ぶ可し
又云く之れは就ては學校教員と僧徒の持ち場と云ふことを判然たらむ可きなり是れ皆亦大切なること也政治家宗教家たる者深く注意せざる可から

ざるありと其の悉しきこと龍が別記あり
又云く凡そ政府の文明の日々進をるは僧徒たるもの徒だ暗昧沈睡して之を關する所以んを知らざるとき人民と云ふもの唯感して言ひ出すことの能わざる者あれば自然政府の文明は導かれず宗教を信ざる心の菲薄なるは是れ實際の勢ひありて之れが即ち宗教敗却の原因となり此の敗却の又と回轉して遂に政府の敗蓄を萌發することになりて邦の不幸を來たすハ又た實際の勢ひあり憾心せざる可けんや

又云く余日本の近古以来を考ふるは徳川三百年來
偏に鎖港を堅守して少も世界の文明と云ふこと
は注意せざりし故に邦の文明と云ふものが全く湮
滅したり其れ故に第一人間の自由と云ふ運動を從
ふて失却したるあり又た其の教育の進歩を就ても
神佛の「ベウストザイン」(感知)を結び附けることを忘
失せし故に邦の順序と云ふ者が解散したるあり實
に慨歎の至りありあらを也斯くある上るは知識や文
明而已にてい所詮此の舊深を救ふこと能わざるは
立ち至りたり遂に貴國の為り來らざる所なりと

云々然るは之れを救ふの方術は於ては博士は委詳
き説あり即ち我が別記の如く龍云く其れ順序ハ一
切邦を治むるの原則ありて假令如何ある文明と云
へども苟も之れを失するるときは文明も文明も非ず
邦も亦と邦も非ざるあり嗟呼天子も之れは依りて
以て其の位は立ち民人も之れは依りて以て其の分
は安んぶることを得るもの也謂ふべし順序は邦を
治むるの第一國珍ありと
又云く今日世界の權衡を以て之れを云へば貴國は
於てハ一日も早く邦の文明を興起し邦の順序を失

却せざるやう為さ可き也又た此の際に當りてや其の僧徒たるものハ其の憂塊を救ふを以て職とをばき也然して之れを救ふの道の先づ他邦の文明即ち歐洲の文明を來て以て我が邦の人心に結び附け以て之れを己れの物と為し之れを己れの物と合せ其の文明あるもの全く日本固有の文明とありて此の文明の力から轉然として彼の他邦に向ふて以て屹立對峙するも足る之れをナトア、ベウストガイニ能く文明の意味を得たると云ふ意と云ふなり然るは是れまでの日本人の^{オリエント}大和魂とか云ふて我れハ即

ち日本人ありといむりこみりの「スタール、ツムハイ」ト云ふて其れの仕方の死い蠻野人と云ふものにして今日の右等の暗頑いをつむり改捨して早く其の所を為し玉つゝ歐洲の大言家云く全亞細亞の命脈ハ蓋し今後二十年の内ち在らんと果して其の見る所あつて之を云ふ歟知る可らずと云へども即今東西の現状を以て之れを云ふときハ或は是れ免しとも云ふ可うらざる也貴國も頗る東洋中の高眼果して之れを何とか思へるやと云々龍今この話一を爰に示すものハ日本どあり居てハ實に夏

天竺行跡 卷之二
虫の氷を疑ふと云ふ(莊子も在り)の類ひありて内の
こと計り考へ(上)云ふた「ゴンクレートの考へ」で居
りかゝる外の邦のこと等を考へ(上)云ふと「アブス
トラクシヨンの考へ」ぬやうな事での廣く現今のこ
とを話しても亦と遠く將來のことを話しても百事
狭少暗昧ありて話しの解りませねば是れより先の
身を保つことも邦を護ることも何れもなすことも為
るまいと思へり日本人諸君よ庶幾く深く懺心
せられんことを
「バンドラビクセの話」

一日午後第一時「ワインナ」府の「ビシヨツスグレート」シ
ヤウ(即今奥國第一の高僧)師余が「ワイトリンガ」村
の寓居を尋ねられ「故先づ取り敢えず「カツフエ」(豆
茶を點して笑談相ひ和むるの末「グードシヤウ」師
云く北畠君よ即今日本の實況を見るは宛も「バンド
ラビクセ」の函を開けたやうな者よ非ざるや如何んと
あらば此の中「バンドラ」とい女の名ありて「ビクセ」
との函の名あり此の「バンドラビクセ」の話は古昔
一二千四五百年以前は希臘の「ポリテイスマス」(多く
の神を祭る者流を云ふ)の人の組み立てたる話よ

天竺行跡 卷之二
四十三

して其の話は云く爰は「チヨイス」と云ふ天の神あり
此の世界の荏苒として移り變るは從ふて人間のだ
んく惡奸なるを悲み即ち憤然として云く我れ一度
此の世界中の人を鑿殺して更は善良の人民を造
らんとすと此の時「プロメーテウス」と云ふ神が之れ
を嚴しく止めて云く少く恕せよと「チヨイス」云く
如何ん「プロメーテウス」云く凡そ物先づ充分は之れは
教養を加えて然して後ち彼れ尚ほ惡奸あるときい
即ち彼れの罪あり今大神の慈仁未だ充分あらず
て之を罰せんと我れ大神の爲めは太だ采らざる

所なり我れ今之れを考ふるは大神の慈惠未だ世界
の爲めは火を興るざるを欠典とをる也其れ火は世
界の珍寶文明の大本なり庶幾くの速くは之れを興
へられよ百民必む其の開達をる所あつて此の如き
不良は爲さざる可き也若し之を興ふるも彼れ尚
は不良ならば其の時大神の意は任を可くと云へど
も大神敢て之を容まざるなり是は於て「プロメー
テウス」竊るは天子昇ほり火を來り來つて之を世
界中に賦與せられけきば人皆ふ此の火を得て大い
は其の智了を開覺し百用悉く文明は達せんとをる

なり然るも「チヨイス」大神其の我れも竊くも火を采
 り来りてを怒り何れも兎も角一旦之れを妨げて人
 民を不良に陥し入れ然して後ち之を全鋤せんと
 して即ち「プロメーテイス」を罰して先づ之を「アウ
 カゾー」希臘の高山にして今も地圖書其の名を存
 する也」と云ふ高山は縛き措き然して後ち天を昇り
 一人の女を「イデアーリン」美備は造り立つることよ
 造り其れは「ピクセ」と云ふ函を與ゑて下地は下さん
 とするは際して天の諸神種々文明女紅病氣狡猾等の
 餞贈ありてを皆な之を函中に入れて云く汝ち下

地に至るとも必む之れを開く勿れと戒められたり
 彼も下地は下り「プロメーテイス」の弟「エピメーテイス」
 と云ふ神も嫁せられし其の後ち夫妻計つて之を
 を開きし其の函中より種々不可(文明狡猾病氣
 惘難等)の物が飛び出せし付き是れより世の中は
 於ていろく苦惱あることが生じたりと云へども先き
 は火の賦與せし因て文明の開進も有む人皆
 亦之を具ふる所以を知るが故に「チヨイス」の策
 遂は行わざり也此の如く函が開くや否や可不
 可の物雜起せしと云へども文明の力から能く之を

天竺行跡次所見 卷之二 四十五

區別して其の不可を撲ち退けざりと云ふ話の主義也即今日本も之を同トく維新の始也「バンドラビ」クセの函が開いて以来た不可不可(文明やら鐵道やらコロリやら狡猾慥悍等)の物が雜來(歐洲より反對に入り来る)して殆ど其の區別を失ふことを最要とせるの秋あり若し苟もこの區別を失いて文明やら狡猾を妄信雜行されたるなら遂に日本の大害を惹起せん歐洲より入来る物トやとて皆ふ可といふ云へまをいさすまは北畠君よ爰が區別を可きの大切ありありまをといふとまは故に余邦の爲に深く信じて大

いは感謝する所あり也嗟呼他國の人でさく文明の大家の此く云ふて呉ねます况や日本人民たる者我が「フアーテルランド」(父母の邦)の爲に深く憾心せざる可けんや

區別に付ての大事

道龍云く右に就ての種々區別を可きこと之を有りと云へども殊に注意を可きの精神上の區別あり如何んとなれば右函を開いてより歐洲より入り來りた精神のゴツプ(頭)に在りと云ふ然るは我が地方に於ての精神の「ヘルツ」(心臓即ち腹)に在りと云ふ也

あ大變トや同ト人の一つの精神が東人其之を腹
に在りと云ひ西人も頭を在りと云ふて其の居所甚
ご一定せず同一雜來物の其の中でもコロリヤ狡猾
位ひふ者あれば又た我々の手もても如何やうとも
處致の出来ることも有れども何よを云ふても世界
第一の大切物たる此の精神の居所が二つに分れて
い大變トやいっそ誰れ歎を頼んで一方は方付て貫
ふ歎又た誰れのを頼んで折合を著けて貫ふた者で
有らふ歎全体どうしたら可からふ歎トやと云ふて
中々容易に折合ら著きまをまいと云ふも西人も

西人で何んぞ込み入りたことでも有ると「イヒ、ハヤ
スタンデ、アイネコツプ」と云ふて私の「コツプ（頭の）理
解した私の頭が兼知したと云ふて頭を叩ひてりき
んで居り又た東人の東人で何んぞ話のつゞまり
よなると私の腹に入りた私の腹の承知したと云ふ
て腹を叩ひてりきんで居る此く外交日進の今日若
しも彼此の話の飯着が頭と腹へ所を異ふて落
ち込むやうなことでい後ちよ不都合が有りるさま
い歎其の上急條約改正とて人民雜居とかみありて
いどんな食ひ違ひが生むるかも知れません（ちと大

笑ひ言ひ方おれども（雑來尚ほ日の浅き其の中より早く一つよなるやうに致し方の死き者歎日本全國の諸君よ何ぞ此の裁判を印度日ソフヒ一国家たる日本のお坊さまが為さねばならぬ所あり然し今この無學のお坊さまでいと六つり敷あらふと存ドまを）つゞまり宗旨の全類をる所以なり其れも就ても早く日本の宗濁を大洗し此の如きことハ速に區別判然して日本諸君をして早く此の冗感を了開せしめたく思ふら生が改正を急ぐ所以の一原なり道龍云く「ガソツ、エヤデ」（地球上）の人ハ皆不是也人

子して人悉く四支九竅ありて一五一竅の欠けたる人のあること死き之を「アツレ、グライヒ、ペルソーネン」（都テ同一の人と云ふこと）と云ふ也此の如く人皆不同ト人にして其の精神の居所に於ける此の如く頭と腹との食ひ違ひに居る可きの理あらんやいづき其の居所も亦同一に飯せざるを得ざるあり我れ之を為りよ注意をること殆んど三四十年來なり然るも古昔一釋尊の阿難舍利弗等も向ふて精神の在所を問わたりよ阿難等の答へ遂に十箇所精神も頭も在りと云ふの説も既よこの十所の内も在

る也。及んで尚ほ未だ之れを決むること能わざり
しこと有り此の時印度に二派の「アラマ」(外道)あり一
つハ「イデアールイスモス」(無形を主とむる者流)一つ
ハ「マテリアールイスモス」(有形を主とむる者流)あり
此の中う「マテリアールイスモス」の教名が印度の文
明と共に土埃に入り其れより羅馬及び希臘に亘り
て遂に歐洲一般をして精神の頭を在りと云ふの説
を為さしむ然るは近世に至り有名なる「ピロソフイ
」家たる「ヘルマン」氏更は印度の「マテリアール家勝
論」の説に因りて此の精神頭を在りと云ふことを巨

細に説き示めさるると云へども此の説たるや原と
印度より追ひ出されて来た所の者なまば之を分
折して論じ詰めると實は淺薄なる説ぞかし嗟呼歐
洲の如き文明の則ち文明と云へども頭を叩ひて精
神と云ふが如きは實は大笑の至り也余今度び在歐
中諸國の大家と此のことを論查せらるは一つも信じ
るは足る者无かりし也いづき此のことハ他日六字
名義と云ふ書二巻を著して以て委く説示を可き也
故に今ハ之を略す
外教を信じまば外人と親むは便利と云ふの説

天竺行記 卷之三 四十九

一日「スタイン博士の席に會して即今の際日本人が
外教を信さねば外國と親むに便利ありと云ふの話
も及ぶ也龍令その時の槩意を爰に述んよ抑も即今
我が日本に於て間々言ふ者あり云く我が人民外教
を信さねば外國と親むに便利ありと此の言果して
然るときは其の外教と云ふ者の各國各種よりして太
だ一定せず然るは今日日本に於て其の外教と云ふ者
は果して何れの邦の宗教を指さや又た親むといハ歐
洲中何れの邦及び何れの人と親むを云ふや又々便
利といは是れ亦た何ん等の便利を云ふや倘し之れを

英國の宗教を信じて英人と親むを便利と云ひ又た
或ハ獨逸の宗教を信じて獨逸人と親むを便利とす
と云ふならば先づ英國の宗教を以て之を云んよ
其の合衆大英國(英倫と威爾斯と蘇格蘭と阿爾蘭の
四ヶ國を合して合衆大英國と云ふ也)中英國の如き
ハ「エキスコツペー」の「プロテスタント」宗を以て國教と
を其れに反して蘇格蘭ハ「カトリック」宗を以て國教と
て國教として阿爾蘭ハ專ら羅馬カトリック宗を以て之
れを信奉する也此の如く一國中その宗と異なる所の
者各々異にして是等の宗旨互に相ひ轢陵すること

天竺行路次第見 卷之二 五十一

宛も秦楚の互に相ひ抗るるが如き者あり又た獨逸國の如きハ「ルータプロテスタン」宗を以て國教とすとのハ云へども羅馬カトリック宗や猶太宗を以て信奉する者亦た太だ多數なり其の上へ二十六聯邦中索遜國の如きハ全國都て羅馬カトリック宗を信奉して少しも獨逸國教の宗規に尊順せざる也是れ等の宗旨も亦た互に相ひ轢陵すること宛も趙魏の相ひ容れざるが如き者あるハ所謂る似て非なる者を相ひ嫌ふの所為にして是れ皆一國同民の内教にして尚ほ此の如く然り若し又た露西亞と獨逸を以て

之を云ふときハ曾て彼得斯堡(露西亞の都府)に至りしとき海軍の大將兼參議「ブーチャチン」云く我の希臘教の如きハ真に神の親教と云ふ可き者なきも彼の「ルーダプロテスタン」宗の如きハ彼れ原も大貧憫僧にして黄金を貪婪せんが為りは切りに神經を芟除したり切りに妄言浮説を画造して一宗を開立する杯と云ふことハ天神の大罪人なり實に信を可からざる者ハ「ルータ」教あり等と其の相ひ容をざるの太しき宛も氷炭に於けるが如き者あり是を即ち邦と邦との派流を以て之ねと云ふも亦と復と

天竺行路次第見 卷之二 五十一

此の如し其の他各邦の如きハ槩して知る可き也嗟
 呼原と是れ同一源の教にして其の支流は於て此の
 如く相ひ轆陵をること却て疎遠なるブジイスモス
 (佛教)は於けるよりも尚不_レ太だ甚だしき所以の者ハ
 所謂る其の似て非ある者と嫌ふの所為よりして迺ち
 紫の紅と奪ふを惡むと云ふ者其れ是を等の類を云
 ふ歟凡そ外教の各國は於ける其の實際槩ね此の如
 し然るを外教を信むれば必む其の親みを得る者と
 して日本流の小抄子定規の考へを以て妄り之を
 と信むるとも或ハ一郷の人民とい且く親みを得る

有るも他の一郷の人民とい其の親みと失わざるを
 得ず又た假令一國の人民と且く親みを得る有る
 も又た他の一國の人民とい其の親みを失わざるを
 得ざる也如何んとなごバ一郷の教を信むれば他の
 一郷の教ハ其の反對は立ち又た一國の教を信むれば
 他の一國の教ハ其の反對は立つを以ての故也な
 り是れを以て之を云へバ各國の各教を各信して
 各國の各人と各親をることハ有名なる筒井順慶先
 生と云へども恐くハ之を果し得ること能わざる
 可き歟又と假令一郷の教を偏信して其の一

郷の人と其の偏親をるを得るも我が全國(日本)の安と確持をる程の親よハ餘程不足たる可し又たよしや一國の教を偏信して其の一國の人と偏親をるを得るも亦と他の各國の人之をを隱妬疑視して其の慮る所あるとき又た我が日本の大親を全ふる所以人の得策よ非ざる也然るときは外教を信ざれば外人と親むは便利なりと云ふものハ果して何等の言とやせん實よ來るよ足らざる元誓の遼言と云わざるを得んや廻ち下等人民の如きハ且く之を措く其の上等世界よ於て或る邦の元老(多年

原書等を理解して天下の人民を教養せる人等)とか或る邦の宿望(多年政治)參與して邦を補けし人等とか最も邦の國幹たる人々の中よ或る此の言を明稱して易々少しも省る所なき者あり其の意果して何等の意ぞや蓋し此の一新奇言を以て自ら計るは汲々として我が邦の大事を熟思するは違ま有さる為め歟何よせよ邦の元老宿望とも云はれる人が餘り軽忽元誓の至り也話しが段々爰まで進んご所で滿堂大笑然たり(該談の取意是よ於て「スタイン」博士云く上みよ云ふ所の親(外人)と親むと云ふ者

天竺行路次第見 卷之二 五十三

なりなる者ハ必竟无識狭少の親みよしして我が日本
の為めはただ来らざる所なり然るは即今日本廣く
各國各宗の來入を黙許して些少も之れと拘距する
所なく是れ實は公平と云ふ可き也其の上へ若しや
條約改正にも成り其の來入を公然明許されたるら
む東洋第一の卓見國たる所以よしして其れこそ各國
の各宗は對して宗旨上の親睦を全ふするよし足ると
云ふ者なり是れ即ち日本宗旨上の大親を全ふする
よし足ると云ふ可き而已然りと云つども此の宗旨上
の大親と云ふ者ハ永年累久遂に其の邦を維持する

よし足ると如何ハ次下よ於て辨む可き也
以上外教を信むれば外人と親むは便利なりと云ふ
の得失と沙汰をること此の如き也(以上槩ね「スタ
イン」氏の意は基く也)
以下の宗教上の親睦天下を維持するよし足らむと云
ふことと述べる也是れ亦た「スタイン」氏の意は基く
なり
上よ云ふが如く宗旨上の親睦を全ふしさをねが
我が天下を維持するよし足ると思ふは大なる方鑿
圓柄の食ひ違ひ也凡そ邦の國幹たるもの此の間は

中りて岐惑踟躕すること勿れ如何んとなれも假令
ひ此の如き宗旨上の親睦を之れを修むること有る
も若し一朝邦と邦との間は於て苟も其の利害得失
は亘る事の發現を有るときは兩國忽ち對抗激論
して遂は戦ひ以て其の利害と決せざるを得ざる有
るときは其宗旨上の親睦を以て其の論尖を理解休
止せ令むること能わざるも古來歴史上は於て識者
の知る所なり然らば則ち宗旨上の親睦と云ふ者と
我が天下を永遠に維持するに足らざること亦た知
る可き也今其の一二を擧て之れと云へば獨逸と瑞

西とい同一なる「ルータ、プロテスタ」宗にして共
是れ同宗親睦の邦なり然るは千六百年の頃事故あ
りて英略ふる瑞西王「ゴスターフ、アードルフ」獨逸(獨
逸帝「ペルジナント」第二世の時あり)を伐つ此の時
佛蘭西の太政大臣「レシロイ」(此の人を僧徒よりして「カ
ルジナル」の位に在りし也)が初めを金を出して瑞
西を援けしは后ち兵を出して之れを援け遂は歐
洲中有名の大戦は及びたり然るは佛蘭西の如きは
「羅馬カトリック」宗にて瑞西とい素より異派无親の
邦なれども却て之を援けて大は獨逸の軍を伐

一こと有り是れを以て之を云へば瑞獨との同宗
の邦よして此の如く瑞即ち獨を伐ち佛瑞の異宗の
邦よして此の如く佛却て瑞を援けしこと有り又た
露西亞を希臘カトリック宗土爾其の「マホメット宗
よして素より異派あり又た英國の「プロテスタント宗
よして上み二國(露土)と異派あることを是れ亦と人
の知る所あり然るは千八百五十六年の頃露土兩國
の間は於て一朝事故ありて露大は怒りて遂は土
のセバストポールを伐つ此の時英國其の利害の遂
は己を及ばんことと恐きて自ら獨佛の兩軍を率

て露兵を土の「セバストポールに伐つて大は土を
援けたり是を等の軍戦は皆な是れ同宗の邦よして
相ひ戦ひ異宗の邦よして却て之を援けたる也是
れは依て之を云へば假令ひ同宗親睦の邦と云へ
ども其の邦の利害得失は依ては或は以て之を戦
えざるを得る又と異宗の邦と云つども或は以て之
れを援けざるを得ざるを皆な是れ其の邦の利害得
失は依て生る所の者あり然らば則ち其の宗旨上
の親睦と云ふ者の此の如き邦の利害得失等の際
中ては少しも其の功力を持てること能わざるや知

る可き也

然して此の邦と邦との利害得失の際子中て其の邦の安寧を持つことハ全く常時は政治上の治術は在りと云ふ云ふ博士詳悉は余は説き示さざたりと云へども余ハ政治家は非ざれども今爰は略を聞き度お人とお出でふさね

然して宗教の政治は與かり文明は關する所以の事理を詳々をさること余が別記は乗在せり他日便を疎て述を可き也之れは就て西半の宗教は能く文明と其の權衡を得ねども東半の宗教は遠く文明と

其の楚越と為きと云云嗟呼我が人民諸君は如何よ文明の食ひ違ひが有れむとて西教の獨り文明は權衡を得るは局り又た我が東教は獨り文明は權衡と得られざるは局るの理あらんや又と其の上へ西人の金人よも非ざる可し我が東人の木人よも非ざること均しく是れ人なれど何んの權衡の采れざることと之を有らんや然るは此の如く東西の選庭と為さ所以の者の必竟して彼れ之れを勉め我れ之れを勉めざるより此の食ひ違ひと為さ至る而已決して別種の原因ありて然る所以は非ざるなり

天竺行路次第見 卷之二 五十七 六十三

是れ即ち龍が悲憤慷慨矢を折り誓を建て齧トて云く我れ之を救はざんを將た誰り能く之を救わんや我れ必だ此の佛教を改洗して此の権衡を大正を可しと我が人民諸君よ且く我が爲を所を見よ文明を興さんとせざるよと廣く歴史は通達を可きこと一日「スタイン博士云く今日全世界は於て西と先く東と先く苟も此の文明を興さんとならむ先づ歴史上は就て「チビルガチラン」(開化)と「コルトア」(文明)との意味を知ら令るを以て急務とせざる也之を知らん

とせざるよ先づ歴史は二た通り有ることを知る可き也一ハ「ゲレヒテ、デヤ、ヤウロツペー、ジーセン、スタテン」(歐洲各國の歴史と云ふこと)一ハ「ヤウロツペー、ジーセン、ゲレヒテ」(歐洲一般の歴史と云ふこと)なり初め歐洲各國の歴史といはれハ歐洲各國各種の歴史より即ち佛蘭西、英、利、斯、獨、逸等の各自の歴史を乗載されたる歴史と云ふ也(此の各國の歴史ハ皆己が邦のことに主とて書くを原意とせ是れ即ち各國歴史の体裁なり)此の各國の歴史ハ即ち日本や支那の歴史等(其のこと柄と年時は編着して唯た編

年事實ねんじじつの止とどる書き方と「コロニス」と云ふ是れハ原しげと希臘きりくの言ことバふして唯ただだ時ときのありさまと書く
と云ふ也なりの書き方とい大おほひは異ことなり即すなはち獨逸どいつ歴史
を以もつて其その一例いちれいと云へば先まづづ我われが邦くにの今日けふ現在げんざいの
「チビリザチオン」(開化)ハ原もとと「アルトヤレ」(大過去)の
希臘きりく羅ら旬しゆん羅馬ろま等の開化かいけより此こゝの如ごとく經けい移いし此こゝの如ごとく
遷移せんいし來きりて即すなはち今こん此こゝの如ごとく開化かいけを保たもつことよな
りし今こん此こゝの現在げんざいの開化かいけと云ふ者ものの決けつして立
ち止とどまる者ものは非あらざらざと云ふハ歐洲おしやう一般いぱん歴史れきし發行はつこうの第だい
一いち主義しゆぎありも亦またと將來あやうらいハ如何いかうが開進かいしんを可たきやと

云ふ所ところと深く感かん知ちせ令しり頗まぶる人心じんしんを發育はつよく興起きうきを
ると以もつて第一だいいち主義しゆぎとをるが故ゆゑは歐洲おしやう各國こくごの人民じんみんは
於おてハ能よく此こゝの「チビリザチオン」の意旨いしを解得かいとくして
其そのの文明ぶんめい教育きういくの何なにも者ものたると又またた人間にんげんの順序おんじゆと云
ふこと、又またた道徳だうとくの何なにれは在あると云ふこと、を領りやう
知ちるが故ゆゑは此こゝの如ごとく萬國ばんこくは卓越ちやくとくしたる文明ぶんめいの結けつ
菓くわを發育はつよくしたる也なり亦またた此こゝの如ごとく萬國ばんこくは卓越ちやくとくしたる
民人じんじんの氣力きりきと興越きうえつしたる也なり是こゝれ豈あらざる事こと物ぶつ編年へんねんのみ
の歴史れきしの能よく為なり得える所ところならんや其その識者しきしやたるも
の此こゝの東西とうしの歴史れきし上じやうは於おて此こゝの如ごとく逕庭けいていをる所ところあ

ると知て然して后ち運動を可きなり

次は歐洲一般の歴史との其を歐洲の此の如く各種
各國は分列して發揚する所の開化は於ても亦左
右參差有らざるを得ると云へども其の原との一
の「チビリザチオン」の大源底より來るものよして是
れ此の源底如何にして此の如く遷移し此の如く轉
化して此の如きの現況と形容するやの秩次と其の
源意を基ひて「カオザール子キステ」(源意の秩次と
經查をること)之れと即ち歐洲一般の歴史と云ふ也
是れ此の歴史の治術の大本文明の大原よして歴史

中實は缺く可からざるの一大要史なり然るは即今
歐洲の識者尚ほ未だ此歴史を製作をすることを得
ざると云へども其の學問上は於てハ此の如きの歴史
の之を有らざるを得ざるの深理の既より解するに
至達せり

然るは唯だ獨逸國のみは在りて萬國歴史なる者と
書き初めたり(歐洲中其の邦多しと云へども萬國歷
史を著せる邦は未だ一邦も之れ有らざる也と云へ
ども是れ亦た専ら我が邦の事を原意として記した
る者なれば一般の「チビリザチオン」の第一原意を領

知るるを以て大主義とせざる故へは其のつゞまる
所の我が邦と原意とをるは歸せられ即ち是れ各國
歴史の大なる者と云ふ可き也未だ歐洲一般の歴史
と云ふ可らざる也

即今獨逸國に於て萬國歴史と云ふ者五部あり

一はハ「ウエーベル」萬國史二十一卷 二はハ「シロ

ツセル」萬國史十九卷 三はハ「ベツケル」萬國史十

六卷 四はハ「オンケン」萬國史四十五卷 五は

ハ「ローポルト、フォイン、バンケ」萬國史この史は獨逸人
たる「バンケ」(當年八拾四歳)氏の書く所にして即今唯

だ二卷だけ出版せり以上の五部の皆な是れ獨逸出
來にして他の各國は未だ此の萬國史を書く者一
人も死し是れは依て獨逸の學度知る可き也

右話のつゞきは就て博士「スタイン」氏云く此の如く

歴史の階級あることを領知せるときは自ら「チビリ

ガチラン」と「ゴルトア」の分界あることを領知し得べ

し人苟も此の二つの者の秩序と領知し得るときは

遂に開化の治域は違ふことを得べき也如何んと

なまば抑も此の開化の中は其の文明の何れ者た
ると又た何ん等の主義を以て此の政府と云ふ者と

天竺行各史所見 卷之二十一 六十三

組立てたることと又た世の中よ於てハ宗旨と云ふ者の
の決して缺く可からざる所以との三大至要と知
ることとを得る之れを真全の開化と云ふ也（三つの至要のなり）豈に唯ど
知識のみを琢磨して之れを文明と云ひ之をを開化
と云ふの類ならんや失敬なら即今日本の原書と
讀む人々も或ハ此の「チビリザチオン」と「コルトア」の
語位を混解して居らる、故へは何より唯ど一科よ
依て其の知識を琢磨する之を直ちハ文明と思ひ
開化なりとして太ど此の二つの者の際畔を雜同さ
るが如し實にお氣の毒なることよて其色でハ遂に

邦の大識と發揚し邦の大治と興起をることハ能わ
ざる可き也是れ等のことと善く明詳に領知せんと
せるときハ廣く歴史學を振達せざる可からざる也
北畠君よ此のことハ政治家宗教家たる者と深く意
を用ひねばならぬ所なりと余此の話を聞て立て謝
して云く此の如き話ハ我れ等本邦よ於て未ど曾て
聞うざる所ふして實に我が邦の為りの金科玉條と
云ふ可き也嗚呼其れ歴史學の世に裨益ある其れ宏
大なる哉之れよ就て博士余よ書き與へられし者數
多ありと云へども今ハ之れを略する也我が日本の

天竺行路記 卷之二
三十三

識者其れ深く注意せられんことと大希^大堪^堪ざる也

以上述^述る所の第一第二卷^二は於て日本と發^發してより以來^以た歐洲各國の實況^實及び遂^遂は此の奧斯土利國^奧に入り博士「スライン」氏^氏と日夜論說^論せる所の槩數^槩と述^述ること未^未だ其の半^半と過^過ぎを以て既^既は此の如^如く第二卷の部帙^部を成^成を至^至れり又た其の部數^部を増^増して之^之を乘記^乘せんは此の書卷^書の發行餘^發り遲回^遲して世の人望^人は垂^垂らんことと恐^恐るゝが故^故へは是^是は於て筆と閣^閣せざるを得^得ざる也是^是を以て今回^今は此の奧國^奧と

發^發して「ウンガリ」國^國「土爾其」^土「希臘」^希「羅馬」^羅及び「伊太利」國^國等のことハ都^都て之れを略^略し他日天竺行路次所見續編^續二卷を制^制して以て其の略所^略を再乘^再も可^可き也
同年十月二日午前第七時奧國の「ジート」^ジ「バーン」^{バー}「ホフ」^ホより發車^發して「ウンガリ」國^國より「土爾其」^土と經^經て「希臘」^希小至^小り遂^遂に「伊太利」^伊に入り同十三日午前第七時項羅馬^項より着^着「ホルテラホスト」と云ふ旅宿^旅に投^投ぐる也其れより公使館^公と尋問^尋し續^續ひて有名^有なる羅馬^羅の本山^本と初^初め所々の名所^名古跡^古と點見^點したり此のことハ他日續編^續と茨^茨て委^委く述^述も可^可き也同二十日夜第十一時

羅馬と發し二十一日午前第六時伊太利の「ブリンジ
ー」港に着き同二十五日午前第四時英國の「ペオコ
ンパニー」(會社の名)の「モンゴリヤ」艦に乗じて「ブリ
ン」港より印度に向ふて發航せり

天竺行路次第所見卷二

